

都道府県別賞一等

改めて気づいた祖父の優しさ

鹿児島県 いちき串木野市立市来中学校 二学年

坊野 絢香

私の父は、仕事で生命保険を取り扱っている。父の仕事について聞いたとき、生命保険について家族で話すきっかけになった。生命保険は、自分や家族に何かあったとき安心して治療に専念してもらい、万が一のときに残された家族が困らないようにあると教えてくれた。しかし、多くの人が保険の大切さに気づかず

「保険は自分には直接関係していない」

「何もなかったら保険料がもったいない」

と思う人が多いそうだ。私もそう思った。

私が幼稚園に通っていた頃、祖父がガンになった。まだ、当時の私は当然保険なんて何も知らない。最近聞いた話だが、祖父は、ガン保険に入っていた。どうして祖父がガン保険に入っていたのだろうか。保険の仕組みを知り、自分でも考えてみた。私は、祖父が保険の大切さに気づいていて、「もし自分が病気になったとき、多くの治療費を家族に負担させて困らせたくない」という想いがあったのではないかと思った。そのとき、改めて祖父の温かい優しさを感じ出した。

治療が続けたが、なかなか回復せずに祖父は亡くなってしまった。悲しさと同時に、祖父と会ったときの笑顔や、楽しかった思い出ばかりが走馬灯のようによみがえってきたことを覚えている。

祖母は今まで祖父と一緒だった分、寂しさが大きかった。でも、祖父が保険に入っていたからこそ、祖母の金銭的な面での負担を減らし、ガンと向き合うことができたそうだ。もちろん、色々な不安がすべてなくなるわけではない。しかし、祖母は、

「お金の面で心配が減ったから心が軽くなった。」

と教えてくれた。死亡保険金のおかげで祖母の生活にも支障がなく、今も仕事をしながら楽しそうに過ごせている。そんな祖母を見ると、「祖父が保険に入っていてくれて良かった。」と保険の大切さに気づけた。

父は、自分の仕事についても話してくれた。

「お父さんの仕事は、地域の方々に、生命保険の重要度を広めたり、気づいてもらったりして、万が一のとき大変な思いをしないように、また、病気になつてしまったとき、安心して療養できるようにしてもらうために、お知らせして

## 第60回中学生作文コンクール

いくことも一つにあるんだよ。」

私はそれを聞いて、「保険商品は、作るだけでなく、皆に知らせていく人たちも重要なのかな。」と思った。お客様から、「あのとき一生懸命教えてくれたから、保険金が受け取れて、本当に助かったよ。」と感謝されることもあるそうだ。これが仕事のやりがいだと言う父は、いつもより誇らしく見えた。

父は自分の父を亡くした経験があったからこそ、多くの人に保険の大切さに気づいてほしいという思いが人一倍に強いようだった。私も、父からこの話を聞く機会がなかったら、生命保険がどんなに大切なのか気づくことがなかっただろう。

もし自分や家族に何かあったら、病気になったらと考えるとすぐ不安になる。何もないことが一番の幸せだが、万が一のことは誰にでもある。だからこそ、生命保険に入るだけで安心の材料になると思う。万が一のとき保険に入っておけば、お金の負担が少なく、治療の幅も広がる。他にも数え切れないほど多くの保険があり、一つ一つに意味がある。自分がどの保険に入っていれば安心できるのかを考えると、保険の重要性や必要性が見えてくると思う。

知らないうちに保険の中でも大勢の人と助け合っていることに気づくと、この保険の仕組みがあることがすごいことだと思うようになった。父にこの話を聞けて、自分と家族が入っている生命保険についても興味を持つきっかけになって良かった。保険の大切さを多くの人に知らせていく父を、心の中で応援していきたい。